

2029年8月、NASA探査機がマサチューセッツ州ほどの大きさの金属小惑星に到達する

公式ミッションが導く、科学的根拠に基づいた“その先”のシナリオ

ハリウッドの映像技術ベテランが、小惑星経済の到来を予見——そして人類にとって究極の“遭遇”となり得るシナリオを、科学的知見に基づいて描く

2029年8月、NASAの探査機「サイキ」は、火星と木星の間の小惑星帯に位置する直径280キロメートルの金属小惑星「16 Psyche（プシケ）」の周回軌道に入る。

16 Psycheは、破壊された原始惑星の核がむき出しになったものである可能性が最も高いとされている。岩石や氷ではなく、金属でできた天体への探査機到達は、これが史上初めてとなる。

内部に何があるかは、到達するまで正確には分からない。しかし、その価値については、惑星地質学者によって「10 垓ドル（10 quintillion dollars）」に相当すると引用されることが多い——ただし、このミッションの主任科学者自身は、この数字を「意味がない」と評している。高すぎるからではなく、供給が事実上無限になった時点で、従来の経済学そのものが機能しなくなるからだ。

いずれにせよ、最初の詳細データは2029年に地球へ送信される。そして市場は、通常、査読を待ってはくれない。

16 Psycheへの到達は、もはや仮説ではない。その距離での資源採掘には、3つの能力が同時に必要となる——頻繁かつ低コストで飛行できる大型ロケット、半自律型の掘削・採掘マシン、そして往復の通信遅延の中でも機能するロボット労働力だ。現在、この3つすべてを独自に開発している企業が1社存在し、その最も公然たる野心である火星拠点は、まさにこうした事業に必要な“前線基地”として機能するように見える。

「火星はガソリンスタンドで、目的地は銀行だ」と語るのは、50本以上の長編映画でVFXスーパーバイザーを務め、ソフトウェア開発者であり、長年にわたるテクノロジー未来予測者でもあるスコット・ビリップス氏だ。

ビリップス氏は40年にわたり、テクノロジーとメディアが交差する最前線に身を置いてきた。世界中の映画学校で使用される書籍シリーズ『Digital Moviemaking』の著者であり、最新作は『Post-Cinema: The Age of AI』。

ビリップス氏は、この2029年以降の200年間を『THE BELT』というリミテッドシリーズおよび5部作の小説群として描いている——小惑星がもたらす産業的拡大と、そこで人類がすでに“稼働中の何か”を発見する物語だ。

「私はこれを予言しているわけではない」とビリップス氏は語る。「私はただ、カレンダーを指し示しているだけだ。探査機は2029年に到達する。その先の出来事は、数字を前に進めて計算しただけであって、私が発明したものではない。」

プロフィール:

スコット・ビリップスは、50 本以上の長編映画で VFX スーパーバイザーを務めてきた映画作家兼テクノロジストである（『Walking with Dinosaurs』『Mulholland Drive』など）。40 歳で大学に戻り AI を学び直し、その後ゲーム業界最大手の AI 企業で CTO を務め、ロッキード・マーティン、ボーイング、NASA 向けに自律システムおよび空間システムプログラムを開発した。Videography 誌および Digital Cinema 誌の寄稿編集者を 10 年以上務め、世界中の映画学校で使用される『Digital Moviemaking』シリーズおよび『Post-Cinema: The Age of AI』の著者でもある。

WIRED 誌は彼を「ハリウッド屈指の“ならず者”的先端技術者」と評した。『THE BELT』および原作小説群は、Pixelmonger Studios が制作を手がけている。

お問い合わせ:

Pixelmonger Studios · dev@pixelmonger.com

ミッション背景・関連資料: PsycheSector.com